

「サーモン日記」

ユーコン河には毎年大量のサーモンが遡上してくる。種類も豊富でキングサーモン、シルバーサーモン、チャムサーモン等がいる。ユーコンで暮らす人々は夏の間、河が流れている間はサーモンを捕って生活している。我々も何匹かもらって食べる事ができたが、肉付き味共に最高で忘れられない思いでの一つである。そこで現地の人達のユニークな漁法を紹介したい。

我々の装備に「釣り竿」を入れていた。というのはユーコンではグレイリングやパイクが簡単に釣れると言われていたからである。確かに隊員達はみんな何かしらの魚を釣り上げていたが、私の竿にだけは最後まで一匹もかからなかった。しかし、6/14の流れ込みと交わって以来ユーコンは濁った河となり、いくら釣り糸を垂らしても何も釣れなくなってしまった。濁った水中では仕掛けが効かないからである。ではユーコンの住民はどの様にサーモンを捕っているのだろうか。

7/10サークルで「フィッシュホイール」なるものに出会う。一口で言えば「水車」である。しかし、この装置で日に30匹、場所によっては100匹のサーモンが捕れるのだ。水流によって回り続ける羽は横から見るとJ型をしており熊手のように曲げられた両端には金網が張ってあってそこで魚を掬うのである。掬い上げられた魚は金網の上を滑って横に設置された木箱に入る仕組になっている。こんな簡単に捕まえられるなら苦労は要らないだろうと木箱をのぞき込むと丸々と肥えたサーモン達が生めかしく横たわっていた。フィッシュホイールは決まって岸の近くに設置してある。これは、サーモンが河を上る時に流れの弱い側流を通る性質を利用したものである。

夏の間だけテントや生活必需品を持ってユーコン河にサーモンを捕りにくるのが「フィッシュキャンプ」である。その目的は食糧の確保（と楽しみ？）の為である。モーターボートで仕掛けの間を行き来してキャンプまでサーモンを運びすぐに捌いてスモークにするという作業を行っている。

どのキャンプでも、大人から子供まで一緒になって青空のもと一生懸命作業していい汗をかいていた。

7/12私と高木は父、母、子供6人のフィッシュキャンプに寄って、モーターボートで捕獲現場に連れていってもらった。ここでは「フィッシュネット」も使っていた。これに頭を突っ込んだサーモンはエラを引っ掛けて動けなくなるのだ。

お父さんはフィッシュホイールの木箱をのぞき込むやいなや「Jack Pot!!」と叫んで、25kgはありそうな巨大なキングサーモンを引っ張りだした。これに奥さんも気を良くし、終始ニコニコしていた。収穫は18匹であった。別れ際にドライサーモンをもらう。

7/14中洲の河原でフィッシュホイールを作っている男性がいた。材料は森から切り出したスプルース（常緑の高木）だそうだ。完成したら5年は使用するらしい。キングサーモンを一匹もらう。ここら辺から幾つもフィッシュキャンプが現れ、まさにサーモンシーズン真っ盛りといった風情である。

サーモンは体長80cm程度だが6人でも食べ切れない位の身をもっている。

そしてコクも抜群で言うことはないが、炎天下で弱った胃には辛い。

ホワイトフィッシュは鯉みみたいな顔をして名の通り身も白く淡い旨みをもっているのむしろこの日はホワイトフィッシュの方が人気が高かった。

余ったサーモンの身を切ってスモークに挑戦する。砂を掘って焚火をしてその上に若葉をどんどん入れ、煙を出させる。その上に身を吊るしポンチョで覆って燻す。途中で身が落ちたり、骨組みが倒れたりしたが結局最後は時間不足で失敗に終わった。

7/18 ビーバーで筋子をもらい夕食は夢にまで見た「イクラ」丼である。熱いご飯にのせて醤油をたらしてこれ以上の贅沢はない。また数日後少しトロみがかかりかすかに匂う筋子を食べる時のスリルにもたまらないものがあった。

7/23 テン場について夕食を済ませまだもの足りない春日と向かいのフィッシュキャンプにお邪魔する「フィッシュキャンプの調査をしています」といって話を切り出し色々話をするが、最後には我々の真意が伝わりドライサーモンを一匹もらうことができた。

8/6 ガリーナにある日本の水産会社は今年の仕事を終えたらしく閉鎖されていた。後に聞いた話では今年も何十トンという筋子がアラスカから日本に向けて輸出されたようだ。

8/9 のイェストロウではチャムサーモンという小ぶりのサーモンばかりがかかっていた。キングサーモンの時期は終わったようだ。気温も下がり秋といったところであろうか。

すでにフィッシュホイールも見なくなってしまった。サーモンのシーズンも完全に終わりを告げたのだろうか。思えばいつまでも回り続けるあの水車は真夏の代名詞とっていい位、暑い時によく見かけた。

6月にカナダからスタートした頃、魚達も海から遡上を開始していたのだろう。雌は腹に卵を沢山抱え、雄は野性的な姿へと変貌をとげそれぞれの生まれた川へと帰っていく。サーモンは自分が生まれ育った所が一番安全だという事を本能的に悟り、帰ってくるらしい。ちゃんと場所も覚えているらしい。きっと我々の想像の及びもつかない目印を持っているにちがいない。サーモンを食べながら自分をサケの一生に例えると今どの辺にいるのかということを考えてみた。まだ海にすら到達していない濁流の中を他のサケとひしめき合いながら下っている途中であろう。道中で外敵に食われるかもしれないが、海も見ずに生まれた川に帰るサケにはなりたくないと思うのである。

